

# 支部活動の振り返りと年頭の思い

北海道看護協会 釧路支部

第1副支部長 八重樫 真希



新春を迎え、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。2020度は新型コロナ感染拡大等により、ほとんどの活動を実施することができませんでした。しかし、今年度は役員一同、「できる範囲内でできることをやっていこう！」と力をあわせて1年間活動してきました。この1年間の活動を改めて振り返ってみると常にコロナウイルスを意識しながらの活動だったと思います。1年ぶりの支部企画研修を「新型コロナウイルス感染症における感染対策の取り組み」をテーマに、役員一同慣れない中、いろんな人に指導受けながらZOOM研修の開催ができました。また、管理者懇談会では十分な感染対策と皆様の協力のもと集合研修を開催できました。「新型コロナウイルス感染症院内クラスター時の看護について」をテーマにした講義とグループワークを実施しました。医療・介護の現場において感染予防対策を講じる中、地域の現状を情報共有し正しい知識を得ることができ、ニーズに合った研修だったと評価できます。

また昨年度は中止した施設間交流研修が、例年よりは参加施設や参加人数が減少しましたが開催することができました。コロナ禍で施設の職員と交流を持てたことは、情報交換の場としても有効な時間であり、「共に頑張って乗り切ろう」と元気をもらえた有意義な研修となりました。

まだまだコロナ対策が必要な状況ですが会員の皆様、心身の健康には十分注意を払ってください。少子化、超高齢化社会が進む中、すべての人々がより安心で健康な暮らししが送れるように看護職が担うべき方向性を皆様と共有しながら支部活動を展開していきたいと考えております。そして、施設の会員の皆様と顔を合わせられること楽しみにしております。

新しい新年が皆様にとりまして有意義な年になることをご祈念申し上げまして、年頭の挨拶といたします。

# きんれんか

第54号

発行日 令和4年1月

釧路支部会員数

(令和3年12月)

保健師 85名

助産師 44名

看護師 1802名

准看護師 63名

総 数 1994名

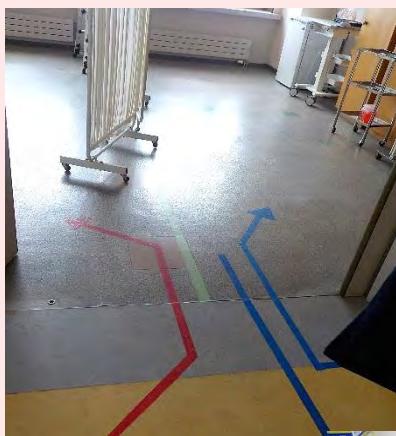


# コロナと看護の現場 2021～2022

昨年は東京オリンピックも開催され、日本中がメダルラッシュに歓喜した一年でした。しかし、2019年12月に中国武漢で新型コロナウイルス（COVID-19）が確認されてから、現在もウイルスは変異し続け、私たちの生活を脅かし続けています。パンデミックによって世界中の社会・経済が停滞しています。それでも、医療の現場は様々な制約の中でも時を止めずに対応が続けられています。新しい発見も沢山ありました。

新型コロナウイルス感染症の終息が見込めない中で、各医療機関や介護施設、教育などの現場では何が起こっていたのでしょうか。看護職たちはどう判断して動いていたのでしょうか…。

今回は、各領域で奮闘する看護職たちの活躍を一部ではありますが、ご紹介します。



# 保健所のお仕事

## コロナ禍における保健師の役割

北海道看護協会釧路支部副支部長

釧路保健所健康推進課

健康支援係 三浦真佐子

北海道看護協会釧路支部会員の皆様におかれましては、新型コロナウイルス感染症の対応について、日頃から大変お世話になり、この場を借りて感謝申し上げます。

さて、この感染症は私たちの日常と社会生活、通常の業務と活動を奪いました。

管内では令和元年2月から令和3年11月末まで延1200名の患者発生がありました。

保健師は陽性者が1名発生すると、患者の積極的疫学調査を開始します。（感染源対策とまん延防止対策）また同居家族や接触者、患者の職場や学校等の集団の場等をすべて調査し所内協議によりPCR検査の必要者を決定します。濃厚接触者には14日間の電話による健康観察を毎日行います。患者の入院先が決まると入院調整や説明、患者搬送、救急搬送時は救急車の消毒等、業務は多岐に渡ります。この2年間は保健所職員全員が役割を持ちコロナ業務を優先しましたが、それでも保健所業務は逼迫し多忙でした。また管内の発熱者は直接病院へ受診ができない状況でしたので、今までに約1万5千件の発熱相談に保健師が対応し、受診のためのトリアージと病院の受け入れの打診を行いました。中には受診を断られることもあり、受診調整をすることの難しさを痛感しました。

この2年間、保健所本来業務をほぼ中止してコロナ業務に取り組みました。道全体では第4波の陽性者が多かったのですが、釧路地域は第5波の陽性者が多く、1日の陽性者が毎日20人を超えたときは心が折れそうになりました。また濃厚接触者の健康観察が明日で終わる前日に症状出現し陽転化することもあり、コロナの恐ろしさを知るとともに落胆する日々もありました。

帰りは零時を越えたり土日も出勤となり、保健師の残業時間が月100時間を超えるため産業医面接を受けながらの勤務でした。しかし、何とか働き続けられたのは、「地域の感染症対策は保健所の重要な役割」という認識と覚悟があったからと考えます。さらに患者に対応してくれる医療機関の看護師との協働があったからです。医師や患者と保健所の狭間で対応してくれた看護師の皆さんに助けられた…という気持ちがあります。本当にありがとうございます。

これから来ると思われる感染第6波ですが、来ないことを祈るとともに、その時は従来どおり看護連携でどうぞよろしくお願ひいたします。



# ワクチンの現場

## コロナ禍のワクチン接種の現場

釧路労災病院  
感染管理認定看護師 馬場 かおり

2019年2月、COVID-19が全世界で確認され、未だ終息が見えない状況です。そのような中、2021年初め、ワクチン接種開始が決定しました。当院はコロナワクチンの先行接種病院として、1か月程度の準備期間の中、医師、看護師、医療職、事務職によるCOVID-19プロジェクトチームを起ち上げました。このチームはワクチン接種等多岐にわたるCOVID-19対応の実働部隊です。チーム一丸となり、先行接種の準備が始まりました。他のワクチンと異なり、ワクチンの管理や希釈方法、接種後の観察の必要性、副反応の対応等、多くのことを決定し実施開始しなければならず、複数回の会議を経て2月19日の初日を迎えるました。

ワクチン接種で難しかったのは薬品管理、ワクチン接種に関わる人員の確保、会場確保や会場設定等様々な点です。ワクチン接種に携わる職員の確保は看護部が最も多く、看護部だけでは困難で、待機場所の誘導や観察などは医療職に協力を依頼し乗り切りました。その間にも通常の診療は行っていますので、ワクチン接種が開始されても、陽性患者の入院や外来受診患者の受け入れ要請は来ます。ワクチン対応中に入院の受け入れ要請、入院調整を行うことも多く、ワクチン対応の人員確保が大変なこともあります。また、一般接種では予約がキャンセルとなり、ワクチンを無駄にしないため、行政と協力して接種者を探すことも度々あり調整が大変でした。2021年はワクチン接種に追われた1年でした。

通常診療を継続しながら、ワクチンの対応をすることは正直大変です。COVID-19プロジェクトチームが一丸となったからこそ成しえたことと思っています。また、行政との綿密な調整が必要ということも痛感しています。3回目ワクチンが始まり、2022年もワクチン接種に追われる1年になりそうですが、COVID-19の終息が1日でも早くなることを祈りながら今後もワクチン接種に尽力していきたいと思います。



# コロナ禍の研修会

## 新型コロナウイルス感染症における感染対策の取り組み研修会に参加して

川湯の森病院

感染管理認定看護師 高橋 薫

この度は、研修会に参加させて頂き、ありがとうございました。

ZoomによるWeb研修につきましては、様々な分野でも導入されており、時間や費用面からもとても良い研修会であったこと、そして何より直接会う事ができない仲間等の顔を画面越しにも確認でき、少し嬉しい気持ちで参加できたのは、同じ業種で働く皆さんも感じたことと思いました。

また研修等で他の方の質問内容についてとても興味があるのですが、その場の質疑応答では見落とし(聞き逃がし)しまいがちです。そんななか今回は質疑一覧(Q & A)を作成送付頂き、振り返りや今一度復習する事ができ、役員の皆様のお心遣いに大変感謝しております。

昨今の新型コロナウイルス感染症は更なる変異株の出現により、脅威や不安等を募らせ、看護職の業務、負担が強くなる可能性を実感いたしました。

市中感染が増えてくる中、感染症病床を持つ病院だけでなく、患者様を守る立場にある私たち看護師の使命はとても重要で、かつ大変なものと感じました。そして何より今回の研修において、釧路管内の状況、対策、市立釧路総合病院の診断から入院～退院の流れや感染対策の実態を詳細まで理解する事が出来、とても勉強になりました。テレビやwebニュースより、近くの病院(地域で特に受け入れが多い病院)での実際というのは、研修会においてはより説得力がありました。研修内容について委員会内で情報提供しましたが、最近では、マンネリ化しつつある情報に比べ比較にならないほど、私達委員の興味を引くものとなりました。市立釧路総合病院の実際の対策を参考に、早速当院の対策マニュアルの見直しを実施いたしました。

最後に今後も様々な研修会に積極的に参加し、感染管理認定看護師として使命感を持って、業務、及び感染対策を着実に進めてまいります。



# コロナ禍における周産期の現場についての感染管理や助産師の負担、

## 妊産婦への支援の変化

市立釧路総合病院

助産師 立浪 美穂

2020年、新型コロナウィルスの世界的な流行が始まりました。日本では4月に緊急事態宣言が発令されました。そこから今もなお、周産期医療機関で妊産褥婦や児への感染対策が課題となっています。当院では全館面会禁止となり、また立ち会い分娩ができなくなりました。（現在は諸条件の中可能となっています。）2コース実施していた母親学級やヨガ教室は当面行わず、母親学級の代替えとして動画配信を作成し提供となりました。産後のフォローとして行っていたすぐ（2週間）健診においては、本人の意向に沿い電話訪問という形も選択できるようにしました。里帰り分娩においては、原則里帰り先から2週間の釧路滞在を経ての当院受診となるよう、予約を取らせていただいております。入院患者全例PCR検査をさせていただき、分娩目的での入院では迅速検査となります。万が一陽性であった場合、帝王切開術施行の分娩同意を説明させていただいております。

このように今まで何気なく行えていたことがコロナ禍では行えなくなり、日々当たり前に過ごすことの有難さを痛感させられています。感染管理のため様々な変更・対策の定着には、新型コロナウィルスがよくわからない最中、試行錯誤がありました。

周産期に関わらず様々なコロナ対策をとることは少なからず負担となることがあります、何よりも様々な変容の中での妊産褥婦の不安は計り知れないものがあるかと思います。立ち会い分娩ができない、面会ができるないといった、そばにいてほしい人にいてもらはずお産に立ち向かわなければならない、上の子に会えない中の入院生活は孤独なものであります。コロナによる制限と制約、我慢が強いられることによるストレスで精神的安寧も阻害されかねません。

こういった中での妊産婦への支援はこれからも続きます。新型コロナウィルス収束は程遠く、これからの感染流行に備えて感染症から母子を守るため、私たちはこれからも安心して出産してもらえるように、今できることを考え前進していきたいと思っています。



# 手術室の現場

## 手を握ることのできない手術室看護師の思い

釧路赤十字病院

手術室看護師 竹越三知

2019年12月中国に初めて発生した新型コロナウィルスは、2020年1月には日本でも感染が発表され、すぐに私たちが働く手術室へ影響を及ぼした。私たちは得体の知れない病原体“COVID-19”から自分だけでなく、患者や家族、手術に関わる医師や他部署、他部門のスタッフの身を守るために、今まで行っていた手術室看護も変容せざるを得なかった。入室前には、コロナ問診票を用いて少しでも感染に当たる症状がないか確認し、検査を行った。問診票で問題ない患者であっても、無症状による感染者を懸念した上で、マスクの使用はもちろんのこと、N-95マスクやゴーグルの使用により、麻酔導入時に発生するエアロゾルから身を守り、検査結果を待つ時間もない緊急手術においては全身防護服を身にまとい、手術を行った。

私たちが手術室で働いている中で、自分がいつ感染者となるか、自分が感染経路として患者、家族やその他スタッフへ感染拡大させてしまわないか、不安でたまらなかった。医療者に対して恐怖心の強い小児患者に、恐怖心をあおるような防護服で対応しないといけない場面、緊急手術にて不安の強い患者に、直接手を握ることができない場面、たくさんの葛藤と戦いながらも、この感染対策を行いながら、より患者にとって不安が軽減できる方法を模索しながら働いている。現在感染者数が減少している現状ではあるが、葛藤を繰り返しながらよりよい手術室看護が提供できるようスタッフで声を掛け合い、助け合いながら、日々精進していきたい。



## 釧路の在宅医療の現状と訪問看護師の役割

株式会社 CNホームサポート  
さいた訪問看護ステーション所長  
今田眞智子

コロナにて会員の皆様には毎日不安の日々を過ごされ、現場で健闘されている事と思います。釧路市内の訪問看護の利用者様に於かれましては、訪問診療、訪問看護師の役割が利用してみて初めて知る方が殆どです。病院では入院中に退院後の訪問診療、訪問看護の利用をする方にご説明されていますが、訪問時に訪問看護のご説明させて頂いた時には介護のヘルパーの方と看護師の仕事が区別できていない方が殆どです。

最近は新聞、テレビでは在宅診療、訪問看護、在宅介護の事が記事にされている事がが多いと思います。しかし在宅で療養させたい、最後は家で看取りたいけど誰に相談したらよいのかと思っている方も多いいらっしゃいます。私も病院に勤務している時は点滴が必要な時は訪問看護を利用できる事しか知りませんでした。コロナ禍に於いては、入院されている方には面会制限があり、最後の看取りの時もご家族様に会えずにお亡くなりになる方もいらっしゃいます。現場の看護師は、ご家族様以上に辛い経験をされていたと思います。当ステーションではコロナの影響で、面会ができないので最後は家で看取りたいと、癌の末期の方も含めて看取り件数が昨年は前年度より増加致しました。今年もコロナ感染がまだまだ油断許されない日々の中で訪問看護師に求められる事も多いと思います。当ステーションの感染対策の一つとして職員がまず感染しない、感染させない事を第一に考え、在宅から在宅への感染を拡げないための対策を遵守しています。特に「手指衛生」に関しては居宅を訪問時に利用者に接触する前に、ケアの前後、退室時にアルコール消毒、排泄物を扱った際は居宅のシンクを借り、石けんと流水での手洗いを徹底しております。今年はコロナ感染にて自宅で療養されている方への訪問看護も必要とされてくると思います。今後は自宅で療養される方、コロナ感染で療養される方に不安なくすごせるように医療機関と連携を密にし、サポート体制に取り組んでいきたいと考えております。



## コロナ禍だからこそ気づけたこと

釧路孝仁会看護専門学校

看護教員 岡田 智重

コロナウイルス感染拡大により、休校や臨地実習から学内実習への変更、講義方法の変更など、当校はこれまでに経験したことのない様々な課題に直面しました。その中でも特に苦慮したのが制限された環境の中で『学生の学びを確保する』ということでした。

臨地実習は患者さんと関わり看護を学ぶ機会となります。ソーシャルディスタンスや非接触などコロナウイルス感染予防の観点から、患者さんに触れることや傍らに寄り添うといった行動に配慮が必要になりました。また、臨地実習の時間短縮に伴い学内実習が増えたことにより、臨床場面だからこそ感じ、考え、悩むという出来事を学内でどのように再現し、学生自身で看護の意味づけができるような事例の工夫や環境の整えに頭を悩ませました。

このような状況下で少し不安を感じつつ卒業生を送り出しましたが、乾いたスポンジが勢いよく水を吸うように活き活きとコロナ禍の医療を支えている卒業生の姿を見て、看護教育の『こうあるべき』に捕らわれていたのは自分自身であることに気づかされました。自分の考えをもって学生に関わることは大切ですが、『こうあるべき』以上に学生それぞれのリアルな学びがあり、それも大切に学生に関わることが学びの場に囚われない教育のあり方なのではないかと考えることができました。そして臨地実習に行けること、対面授業ができることなど、『当たり前』と思っていた学習方法は実習施設や講師の方々の理解と協力があってこそ実現できる貴重な機会であることも実感できました。コロナ禍であることの大変さもありましたが、それ以上に学びの多い2年間だったと振り返ります。

来年度当校は開校10年目を迎えます。10年間の伝統とその時々の社会環境に合わせた柔軟な学びの提供を柱に、どのような状況下であっても学生と共に歩む姿勢と日々の『当たり前』を大切に看護教育に携わっていきたいと思います。



## **編集後記**

一年で一番寒い時期を迎えました。流氷の便りも届きはじめています。でも、あと少しで梅の花の便りが届く日が近いと思えば、気持ちも上向きになるはずです。

新型コロナウイル感染症拡大に伴い、様々な制約を受けながらも看護職は着々と前進しています。釧路支部の活動も新しい形の活動を模索し続けてきました。

今回のきんれんかは、“コロナ禍の看護職の今”をテーマに各領域で活躍する姿をご紹介いたしました。働き続けられる職場づくり推進委員会では、今後もより多くの皆様の活動・活躍等を報告して参ります

## **編集委員**

川野 みのり・田河 貴世  
高橋 祥子・田端 多良子・高崎 直子

## **発行**

北海道看護協会釧路支部

## **編集責任者**

井上 操

## **担当**

働き続けられる職場づくり

推進委員会